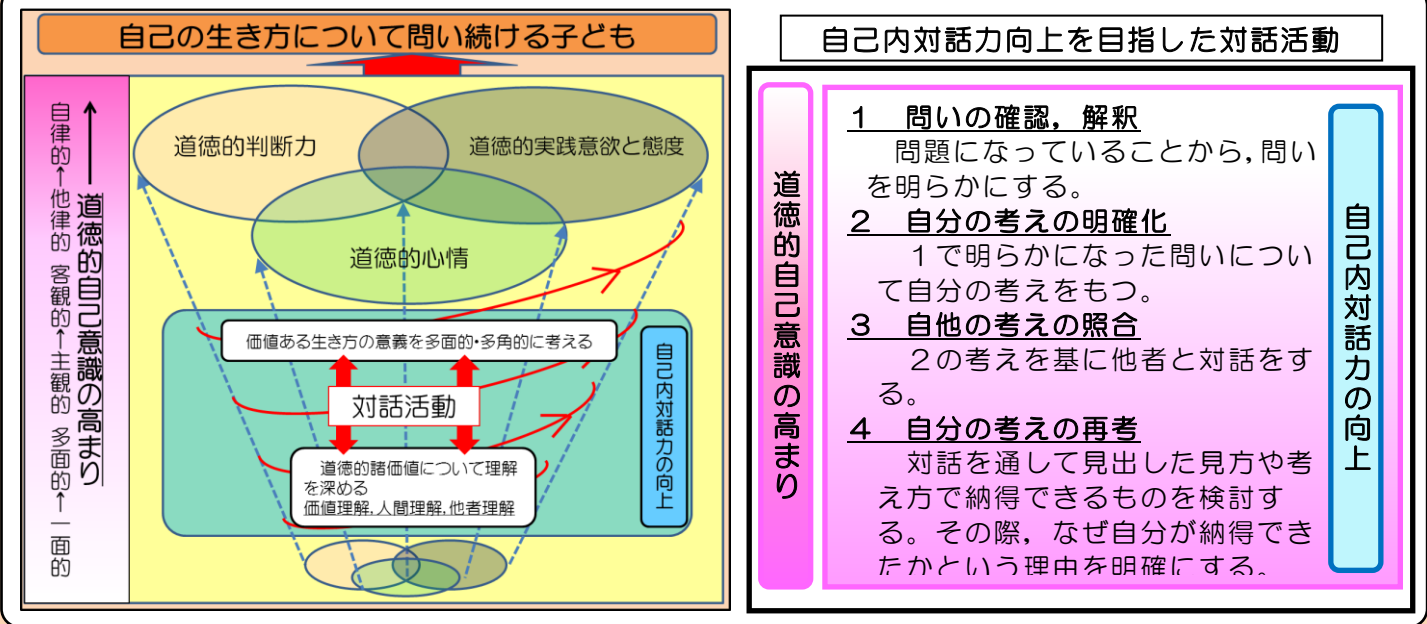


研究の概要

学校教育目標
 「心やさしく、たくましく、進んで学ぶ加世田の子」
 生きる力の理念を受け、知・徳・体をバランスのとれた子どもの育成

研究テーマ
 豊かな自己の生き方を追究する子どもの育成
 ～自己の生き方について問い続ける子どもを育てる道徳科授業の創造～

加世田小学校が目指す道徳科授業構想



研究の内容

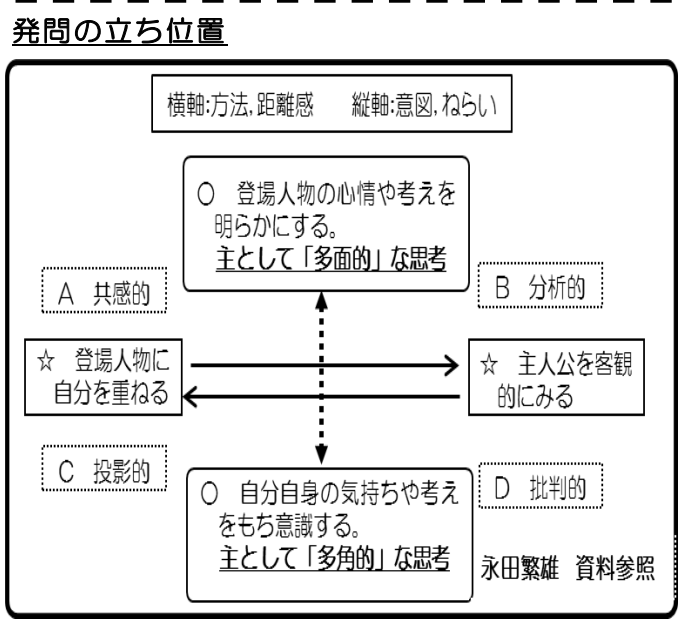
≪研究内容1≫
 発達段階を考慮した学習過程
 道徳的自己意識を高めるために発達段階を考慮した学習過程の設定

心情追究型 小学1年～4年<小学5, 6年
 価値追究型 小学1年～4年<小学5, 6年

- 留意点 (問いの設定)**
- ① 【目的の明確化】
 - ② 【問いに対する切実度】
 - ③ 【問いの抽象度と反応の多様性】
 - ④ 【問いの連続・発展】

- 対話活動の実際**
- ① 問いの確認, 解釈
 - ② 自分の考えの明確化
 - ③ 自他の考えの照合
 - ④ 自分の考えの再考

≪研究内容2≫
 対話活動の充実
 自己内対話力を向上させるための対話活動の充実



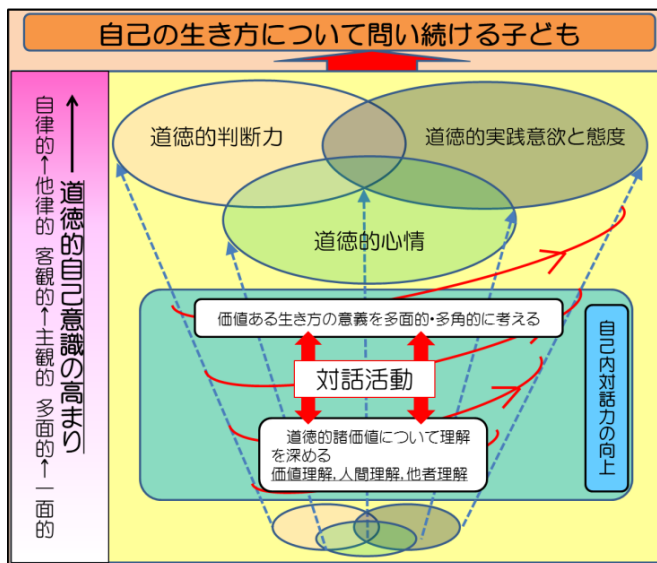
研究の内容

1 自己の生き方について問い続ける子どもを育てる道徳科授業とは

対話活動を充実させて自己内対話力の向上を図るとともに、道徳的価値の意義や道徳的実践の心構えを自分とのかかわりでもとらえ直す営みを通して、道徳的自己の意識が高められる授業

南さつま市では、子どもが道徳的問題場面を主体的に解決し、自律的に道徳的実践をしていくためには、その場面に際して「自分の考えや言動は道徳的にみてどうなのか。」と自問する意識や姿勢（道徳的自己）と「どのように考え、判断すればよいか。」と吟味し判断する力（自己内対話力）が必要不可欠であるとし、これらの育ちを重視した授業実践を推進している。

本校が掲げるテーマ「自己の生き方について問い続ける子ども」は、自分を道徳的に問いかける視点と、問題の解決に向けて主体的に考える視点を含んでいる。道徳科の授業において、この2つの視点から授業改善を目指す。具体的には、本時の主題に迫る「問い」を準備し、多面的、客観的で自律的な見方や考え方の発達的な変化を目指して自己内対話を充実させていく。特に、対話活動の設定場面では、道徳的価値の理解を深め、価値ある生き方の意識を自分とのかかわりでも多面的・多角的に考えさせることにより、自己内対話力の向上を図っていきたい。このような実践を通して、道徳的自己の意識は次第に高められ、問題を問題として受け止め、その解決に向けて前向きに取り組む子どもを育成していけるものと考えている。



2 自己の生き方について問い続ける子どもを育てる道徳科授業の基本的な考え方

《研究内容1》
発達の段階を考慮した学習過程

道徳授業は、道徳的価値の意義や道徳的実践の心構えを自分とのかかわりでも考えさせることが重要である。そのため、学年の発達の段階に応じて、基本となる学習過程を設定し、より主体的な学びが行われるようにした。

《心情追究型》	《価値追究型》
☆ 主人公がおかれた状況や言動に自我関与させた上で、主題について考える展開	☆ 本時の主題を直接的に追究する展開
◇ 主人公が葛藤を抱いた場面や価値のある生き方の意義に気付いた場面などを関連付けて考える。	◇ 対話活動の時間を十分とり、これまでの経験を基に、自分が大切にしたい道徳的価値について考える。
◇ 主に展開後段や終末で、主題について考える。(重点化発問の設定)	◇ 主に導入や展開前段で、主題について考える。(重点化発問の設定)

心情追究型では、主人公の言動に共感しながら自分の考えを明らかにした上で、主題について考える。また、価値追究型では、資料のキーワードを手掛かりに、自分の経験から直接的に主題について考える。この2つの型は、子どもの発達の段階及び学級の実態、資料の特性などに応じて選択していく。

このようなことを踏まえ、発達の段階を考えた学習過程の基本的な考え方を具体的に示すと次のようになる。

[基本的な2つの学習過程]

心情追究型

読み物資料に描かれた主人公の心情に自我関与させ、共感的理解を通して価値ある生き方の意義について考える。また、主人公の言動や判断から本時の主題に迫る問いを明らかにし、自分とのかかわりで考える。

小学1年～4年>小学5, 6年

主人公への自我関与につながる経験の想起

- 1 本時の求める価値に関する経験を想起させる。本時で扱う資料中の主人公の心情への共感につながるように、各自の経験における心の背景を明らかにしておく。
- 2 個々の学習問題を明らかにする。
 - ・ なぜ、できないのか。(阻害要因)
 - ・ なぜ、大切なのか。(価値の意義)
 - ・ どうすればよいか。(心構え, 方途)

資料を読む

※主人公に共感的に読む。

主人公に自我関与して考える。

- 3 主人公の言動から、葛藤することの健全性や価値ある生き方の意義について考える。
 - ① 主人公の悩み, 迷い, 困難(葛藤場面)
 - ② 主人公の言動を手掛かりに求める価値の意義を考える。(中心場面)

本時の主題について考える

- 4 本時の主題(資料中に含まれる主題)について考える。(重点化発問)

自己の振り返り

- 5 学習で高められた価値観に照らして自分のこれまでやこれからを考える。【自覚化】
 - ・ 自信をもった考えや, 大事にしていきたい考え。今後, 自分に必要な考え。実践に向けて意欲をもつ。

自己内対話力の向上

道徳的自己意識の高まり

価値追究型

本時で考えさせたい主題について資料を分析的に読み、重要な見方や考え方を手がかりにして、本時の主題について解釈を試みる。また、他者との対話を深めながら、主題とこれまでの自分とをつなげて考える。

小学1年～4年<小学5, 6年

本時の主題(資料に含まれる主題)に関する話題の提示

- 1 日常にある様々な「きまり」の実際資料を読む

※資料を分析に読む。

主題に関する問いの生起(提示)

- 2 主題となるキーワードやキーセンテンスを確認し、本時の主題となる「問い」を明らかにする。(重点化発問)

本時の主題について考える

- 3 2で確認した「問い」について、対話活動で合意形成を図る活動を通して多面的、多角的な思考を促し、自分自身とのかかわりで価値の理解を深める。
 - ※ 十分な時間があることを生かして、教師は、計画的・意図的に子どもの対話活動に関わっていく。

自己の振り返り

- 4 学習で高められた価値観に照らして自分のこれまでやこれからを考える。【自覚化】
 - ・ 自信をもった考えや, 大事にしていきたい考え。今後, 自分に必要な考え。
 - ・ 新たな「問い」の明確化実践に向けて意欲をもつ。

《研究内容2》

対話活動の充実

対話活動は自己内対話力を向上させるために、他者との対話を通して自分自身の考えを明らかにしたり、より高次の考えにしたりする学習活動である。また、自分の考えに他者の考えを取り入れながらより高次の自分の考えをもつ思考活動ととらえることもできる。そのため、子どもが目的意識をもって問いを解決していくことが必要だと考える。

〔対話活動の留意点〕

- 問いが、ねらいを達成するために必要な内容である。【目的の明確化】
- 問いを子どもが自分にとってかかわりのあることとしてとらえられる内容である。【問いに対する切実度】
- 問いが、多面的・多角的な思考を促すことができ、多様な考えを引き出せる内容である。【問いの抽象度と反応の多様性】
- 対話活動を通して自分の納得が得られる見方や考え方を見付けたり、新たな問いをもったりすることができる。【問いの連続・発展】

対話活動の実際

対話活動を設定する際は、右図のように行う。子どもが道徳的自己意識の高まりを実感できるように、問題となっていることについて自己内対話力を向上させながら、問いを解決していくことになる。

このような、対話活動の学習形態を次のように考えている。これらの形態はねらいや実態に応じて柔軟に取り入れていく。

道徳的自己意識の高まり

1 問いの確認、解釈

問題になっていることから、問いを明らかにする。

2 自分の考えの明確化

1で明らかになった問いについて自分の考えをもつ。

3 自他の考えの照合

2の考えを基に他者と対話をする。

4 自分の考えの再考

対話を通して見出した見方や考え方で納得できるものを検討する。その際、なぜ自分が納得できたかという理由を明確にする。

自己内対話力の向上

ペア学習

自分の考えを相手に伝えやすく、共感が得られやすくなる。また、相手の考えと比較することで共通点や差異点が分かりやすく、自分の考えを整理して、新たな見方や感じ方を得られる。

バズセッション

自由な雰囲気の中で考えの交流がなされ、複数の考えを共有することができるため、多様な見方や考え方に気付くことができ、自分の考えも深めることもできる。

役割演技

臨場感を得ながら、登場人物の置かれた状況を同様に疑似体験できる。また、演技を終えた後の気付きや気持ちを伝えたり、見ている子どもたちの感じ方を伝え合ったりすることで、道徳的価値について多様に考えることができる。

発問の立ち位置

対話活動を充実させていく際に、教師の発問はとても重要になる。なぜなら、子どもの思考力を深め、自己内対話力を向上させるために、子どもたちに考える視点を与えることができるからである。そこで、本校では以下のような発問の立ち位置を基に、発問の構成を考えた。

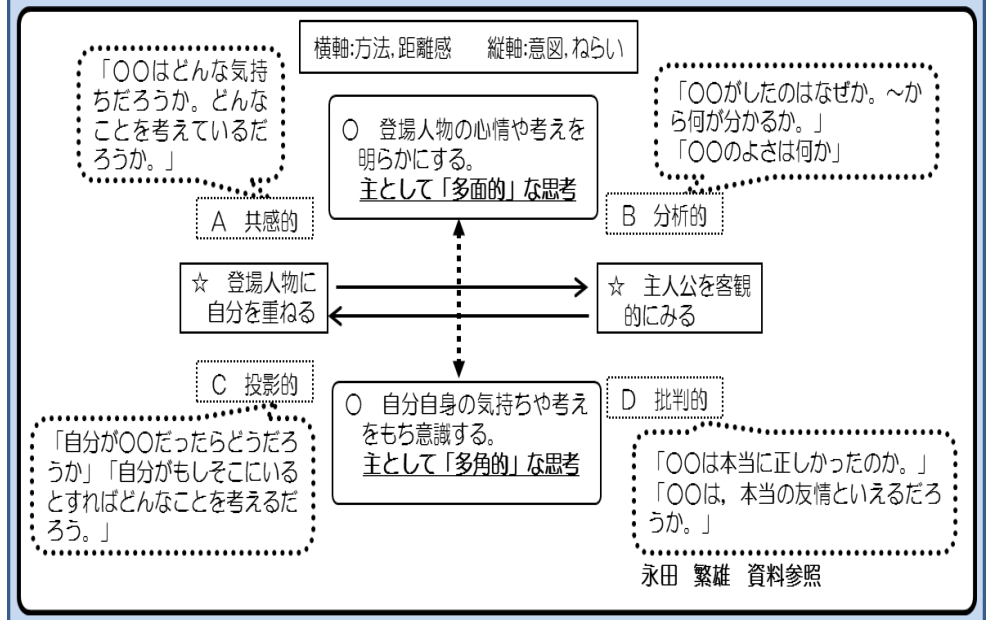
また、目的意識をもって対話活動を展開していくために、教師は積極的に対話活動に介入し、子どもたちに問いかけていく必要がある。

教師の問いかけは子どもの思考を深め広げるために重要である。

[対話活動時に教師が行う問いかけの例]

- どうしてそう思いましたか。(解決策の理由)
- そうしたらどうなると思いますか。(因果関係)
- いつ、どこで、誰にでもそうしますか。(普遍性)
- それで、みんな(相手)が幸せになれるですか。(互惠性)
- どの考えに最も納得できますか。(納得度、受け入れ度)等

発問の立ち位置 (心情追求型)

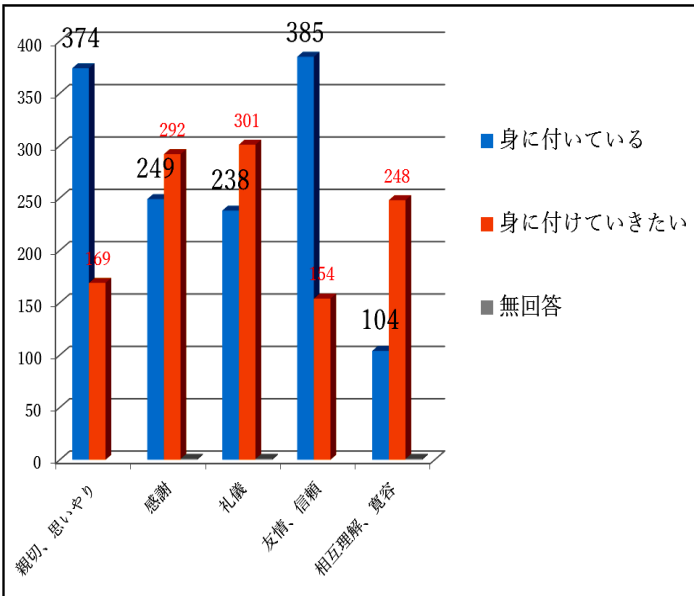


また、目的意識をもって対話活動を展開していくために、教師は積極的に対話活動に介入し、子どもたちに問いかけていく必要がある。教師の問いかけは子どもの思考を深め広げるために重要である。

《保護者や地域との連携》

本校の職員及び保護者は、「主として人との関わりに関すること」について課題を感じており、互いに連携を深めながら道徳教育の充実を図ってきた。そのためにアンケートを実施し、道徳だよりを発行したり、授業参観を行ったりした。さらに地域との連携を深めるために、地域からゲストティーチャーを招き、道徳科の授業について理解を深められる場を設けた。

保護者アンケートの実施と道徳だよりの発行



道徳だより 平成28年9月7日 加世田小学校

いまだ暑さが残ります。ますますご機嫌のほどお喜び申し上げます。さて、6月に実施しました「道徳に関する保護者アンケート」に、ご参加にも関わらずご協力いただきありがとうございました。おかげです。94名様の貴重なご協力のおかげです。このアンケートの結果が発表されたので、簡単にではありますがご紹介させていただきます。今回のアンケートを通して、多くの皆さまが道徳教育に対し、高い関心をお持ちであることがわかりました。この結果を、今後の道徳教育に活かすとともに、より具体的な学習を行い、実践成果として発表していく予定です。10月も同じアンケートを実施する予定です。今後ともご協力をよろしくお願いいたします。

アンケート結果 (1・2年生は全一室、3～6年生は、①～⑤)

学年	1年生の結果
親切、思いやり	7.0% / 3.0%
感謝	5.1% / 4.9%
礼儀	3.7% / 6.3%
友情、信頼	7.6% / 2.6%

① 親切、思いやり (31.1%, 66.9%)
② 感謝 (64%, 46%)
③ 礼儀 (55.8%, 44.2%)
④ 友情、信頼 (29%, 73%)
⑤ 相互理解、寛容 (70.5%, 29.5%)

3つの項目の中で、多くの保護者の皆さまが、「相互理解、寛容」について、今のままでは不十分であると回答されました。「相互理解、寛容」の目標は、「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、相手のことを理解し、自分と異なる意見も大切に尊重し、お互いの考えや意見を尊重し合うこと、勝つだけでなく、負けることも、お互いに自分と異なる意見も尊重する」となっています。

本校では、道徳の授業を中心に、「相互理解、寛容」の目標について考えさせ、表紙の場で話しかけることとする授業を進めています。また、学校という集団生活の中で、自分のよさを発揮したときの仲良しやその行動の紹介を盛り込んでいくことで、学んだことを実践に活かそうとする学習を促しています。

ご感想では、参加できなかった人間関係に対して、「子どもへの関心と丁寧な声かけ、関心をもたせたい。言葉の交わりも増えていくように声かけをしてください。そうすることで、互いのよさを認め合い、よりよい人間関係を築く方が増えてくるのではないかと思います。」

アンケートを実施した結果、保護者は「友情・信頼」は身に付いてきているが、その他の内容項目について、不十分だと感じている。そこで、生徒指導主任と連携を図りながら、道徳だよりを作成し、結果を伝えるとともに、子どもへのかかわり方について発信した。特にこの号では、他者への理解を深めさせるための方法について記載した。

授業参観の実施

10月の土曜授業で、地域からゲストティーチャーを招いて授業参観を実施した。地域の方の思いや努力にふれることで、より実践的な態度を養うことをねらった。また、保護者の中には、アンケートで「道徳科の授業でどのようなことを学んでいるのかを知りたい。」という意見があったため、実際に授業を見てもらうようにした。保護者の中には、「自分自身も考えるきっかけになった。」など、道徳科について理解を深める様子も見られた。



コミュニティースクール（学校運営協議会）との連携

本校は、本年度よりコミュニティースクールの指定を受けている。学校運営協議会の中で本校が研究している内容を説明するとともに、全学校の道徳科の授業を参観してもらい理解を深めてもらった。授業参観の後の懇談会で「子どもたちの活発な意見交換、先生方の発問や授業の仕方等がとてもよかった。」という感想をいただいた。

今後はさらに連携を図り、道徳科授業の中で、地域の人的・分的資源の活用をすすめ、地域、家庭を巻き込んだ道徳教育の推進を図っていく。